

車窓を楽しむ鉄道の旅 その14
多摩川の流れとともに 南武線

1964年に国立に転居したことで、奥多摩・奥秩父・中央線沿線の山などへ出かけるのにはかなり便利になった。丹沢へ行くのにはいつも新宿へ出て小田急線を使っていた。国立から新宿まで中央線快速電車で35分、新宿から小田急線で登戸までは20分で乗換えの時間も含めると一時間たっぷりかかってしまう。立川から南武線で登戸までは30分なので圧倒的に早い。

それでも新宿へ出る方が多かったのは、新宿駅に集合して仲間とわいわいがやがや行くのが楽しかったからかもしれない。おまけに、新宿からだど始発駅なので座席を確保できたが、途中駅の登戸からでは座ることができず、大秦野・渋沢まで立ちっぱなしになるのもいやだった。あの頃の土日の小田急線は行楽客で満員だった。その内に何度か南武線に乗って見て便利さがわかり、立川・川崎間を完走してみたくて往復したこともあった。



車窓から駅の名前を追っていくと、多摩川の流れと何らかの関係がありそうな駅名が多く、またその他の駅名も何か奥深い由来がありそうなものが目立ち、初めて乗った時から気になることが沢山あった。

2023年秋、あらためて南武線を、川の流れに沿って下って見て、沿線の町を眺め直してみることにした。

新宿から出た中央線は中野を過ぎるとほぼ一直線に西へ向かう。立川駅を過ぎたところで少しずつ左にカーブしながら南南西に走り多摩川を渡る。多摩川の流れは立川駅の約2Km南にある。

地名の由来は諸説あっていずれが真説かは不明らしいが、平安時代にここに居を構えていた「立川(立河)氏」に由来するという説が有力らしい。立川氏がこの名を冠した経緯には川の流れが関係していたかもしれない。立川駅の北側の端から出るのが青梅線と五日市線、南側の端から出るのが南武線。東京方面へ少し戻ってから南南東に大きくカーブすると西国立駅になる。西国立と名が付いているが、この駅の住所は立川市羽衣町で、市境までは何百mか離れている。国立市の住民としては、やや腹立たしく感じたこともある。今では駅の側までマンションが建ち並ぶ町になってしまった。

南南東に走っていた電車が、多摩川の流れを意識したように左にカーブを始めて国立市に入り、東南東に向かうようになると民家の間に立つような矢川駅。我が家から一番近い駅だったので、1.4Kmの道を歩いて乗ったこともあった。平屋の家が並ぶ住宅地の遙か西の方に高尾山や道志の山の塊がよく見える。

矢川という地名はこの辺りを流れる川の名前から来ている。立川段丘の崖線の下に流れ出る湧水を集めた川で府中方面に向かって流れていたが、宅地化や道路建設などにより暗渠になったり分断されたりの状態になっている。川の名前が「矢」の川となっていることから、その昔は勢いのある流れであったと思われる。水源に近い場所が矢川緑地として残して守られている。

国立駅から南へ一直線に走る道は「大学通り」と言った。この道が南武線にぶつかるところに谷保(やほ)駅がある。踏切を渡って尚も南へ進むと甲州街道(旧道)に突きあたるが、この辺りは昔は谷保村だった。甲州街道の南側に「谷保天満宮」があり、閑などきの散歩コースとしては最適な場所だった。関東三天満宮のひとつに数えられ、土地の人は「やぼてんじん」「やぼてん」と呼んでいた。創建時期は903年、菅原道真が太宰府に流され

た後逝去の報を受けて、第三子道武が配流先の武蔵国多摩郡分倍庄栗原郷に父への思慕の情から鎮座したのが始まりだったが、養和元年に現在の地に遷宮された。

「谷保(やほ・やぼ)」という地名は、鎌倉時代の文献には「やふ」と表記されており、かなり古くから存在する地名ではあるが地名の由来は判然としないらしい。

南東に走る電車が府中街道と交差する所に、2009年に**西府**(にしふ) 駅ができた。まったくの新駅だと思っていたら、南武線の前身である南武鉄道の時代に西府停留所があった。戦時中に廃止になったが、周辺の人口増加に伴って要求があり、復活した駅というのが正しいようだ。古くから、府中の西にある「西府村」と呼ばれていた土地で、駅名も由緒あるものらしい。西府駅を出た電車は、しばらく南東に走った後東に向かう。京王線との交差点に**分倍河原**(ぶばいがわら) 駅がある。開通当初は地元の地名から「屋敷分(やしきぶん)」という駅名だった。駅名からすると目の前に河原がありそうな気がするが、多摩川までは 1.8Km も離れている。暴れる川の流路は今と昔とでは大きく異なっていたのだろうか？

元弘3年(1333年)、新田義貞が関東一円の武士団を集めて南下して、鎌倉幕府軍を打ち破った分倍河原の戦いが繰り広げられた場所は駅の南方にある。古い地図には集落(村)の名が「分梅村」と記されており、昭和初期の国土地理院地形図を見ると、分梅の集落の南方にある下河原の集落の南側の多摩川の岸边に「分梅河原古戦場」の表記がある。旧国鉄下河原線の砂利採取場所付近が戦場だった。

分倍河原駅を出た南武線は、府中第三小学校の北側あたりで右に曲がり始めて、南南東に向かい**府中本町**駅に入り、北から来る武蔵野線と合する。昭和3年(1928年)の開通以来他線との接続はなかったが、昭和48年(1973年)に武蔵野線が開通したことで大きく変わった。首都圏を大きく廻る約 100Kmの半環状鉄道の起点駅となった。既存の南武線と接続して東京発東京行の大環状鉄道を完成させれば面白かったのに、残念ながら中途半端な状態で終ってしまった。駅の東側に東京競馬場の西門入口があり、レース開催日には賑わった。

競馬場を左手に見ながら南南東に走って多摩川を渡ると対岸の**南多摩**駅に入る。南武線開通時は地元の町名から「大丸(おおまる)」という駅名で、現在の位置よりやや川崎寄りにあった。昭和6年(1931年)に「多摩聖蹟口」と改称したが、後に近くにできた南多摩貨物駅と統合して、現在の位置になり「南多摩」となった。市制への移行が進んで、昭和46年(1971年)に東京都南多摩郡は消滅し、駅名だけが残ることになった。

稲城長沼、駅の南方の住宅地の中にある青渭神社(あおいじんじゃ)は、伝承を遡ると弘仁年間(800年代前半)の創建らしい。多摩川の氾濫による流路変化と崖地からの湧水とで沼地だったことから、大沼明神・青沼大明神などと呼ばれる水神があった。この地形がゆえに「長沼」という地名が生まれたとされている。駅の北口の商店街を歩いていたなら「青渭通り」という表示板が建った路地があった。おそらく神社の参道だったと思われる。明治22年に矢野口村・東長沼村・大丸村・百村(もむら)・坂浜村・平尾村が合併して稲城村が誕生した。発掘された数々の遺跡から見ると、旧石器時代にこのあたり一帯に人が住んでいたらしい。青渭通りを歩いていたなら「エレガントもむら」と書いた建物を見つけた。入口に書いてある説明から、社会福祉法人が運営する地域包括支援センターだとわかった。明治時代始めには百村(もむら)だったことを示す数少ない遺構かもしれない。

矢野口駅までは東京都で、次の駅からは川崎市になる。「谷(や)」の「口(くち)」が地名の由来らしい。長沼と同じようにこの辺りには湿地帯が多かったことを意味している。矢野口村は前述の様に他五村と合併して長沼村になった。車窓から眺めると、多摩川の岸边まで真っ平らな平原が広がっているのがよくわかる。

南東に進む電車の上を京王相模原線が跨いで行くと、川崎市に入って最初の駅**稲田堤**駅に入る。京王線の京王稲田堤駅とは400m離れていて、便利そうで不便な乗換駅になっている。国鉄と京王線の間でどのような話し合いがされたのか知る由もないが、「どうにかならなかつたのかね」と言いたくなる。

1898年に日清戦争の勝利を祝して、当時の稲田村が多摩川の堤防に桜を植えたことから桜並木の名所が誕生し、昭和2年(1927年)の南武線開通時に堤の名前が駅名になった。民家の間に多摩川梨の畑が点在する。稲田堤駅から東南東に進路をとり、**中野島**駅。中野島という地名は、多摩川の中洲が新田開発されてできた「中島新田」に端を発し、中野島村となった。大きく彎曲して流れる多摩川の右岸の膨らみが中洲の名残と考えられる。かなりマンションが増えてきた感じがするが、間に挟まるように一戸建ての住宅が生き残っている。

川の流れとほぼ似たような微妙なカーブをしながら走る電車が、水際まで200mほどに接近すると

登戸駅になる。明治22年の町村制移行で「稲田村大字登戸」となったが、さらに遡ると「武蔵国橘樹(たちばな)

郡登戸村」だった。多摩の丘陵地帯への登り口にあったことからこの地名が誕生したと言われている。現在の地名は「川崎市多摩区登戸」と言う。

交差する小田急線の登戸駅は、開業当初は「稲田多摩川」だったが「登戸多摩川」となり、1958年に「登戸」と南武線と同名になった。この地の川辺は、昭和30年代には都心の小学校の遠足などによく活用された。

電車の発車を知らせるメロディーが「ドラえもん」だったのには、いざさかがっかりした。登戸駅を出ると民家の家並みの中を走り、生活の臭いを感じる景色が車窓を流れて、ドラえもんショックから抜け出すことができた。

宿河原(しゅくがわら)は、名前の響きが気になる駅名だった。曾我物語・徒然草などにも出てくるそうなので、古くから存在する地名のようだ。地名の由来は多説あるようだが、それぞれ確かではないらしい。戦国時代の資料の中に「駒井宿河原」という表記が残されているが、「駒井」は多摩川の対岸(北岸:現在は狛江市)の地名で「宿河原」は南岸にある。川を挟んで対面している地名なので、ことによると往古は「駒井」と「宿河原」は北岸にあったが、暴れる川の流路の変化により南北に別れてしまったのかもしれない。こうした事例は各地の河川の流域に存在する。事と次第によってはこの辺りは東京都になる可能性もあったということになる。

東南東に進み東名高速道路を潜ると**久地**(くじ)駅になる。「多摩川の流に挟(くじ)られた地」から地名が誕生したとする説が有力らしい。多摩川南側を並走している二ヶ領用水は、1611年(江戸時代初期)に稲毛領と川崎領の二ヶ領の農地に水を送る目的で開削された。明治以降には横浜市の水道の水源としても活用された。登戸・中野島あたりに刻まれていた水路はこの用水からの分水路だった。

久地駅と多摩川のほぼ中間点付近に「久地円筒分水」という施設が昭和16年にできた。用水路から来た本流を円筒の導管で地下から地上に吹き上げさせて、四方向の水路に均等に分水するという方式で、国の登録有形文化財になっている。この施設の出現により、それまで頻繁に発生していた「水をめぐる争い」が起きなくなったと言う。暴れる多摩川に翻弄された河川周辺の集落と、人口開削された水路に救われた多摩丘陵近くの集落、水を巡って様々なドラマがあったことがうかがえる。

久地を出た南武線は多摩川からはかなり離れて、さらに二ヶ領用水よりも更に南を走るようになる。南武線は海拔18~19mの所を走るが、車窓の右側も左側も海拔30~40mの丘陵地帯になり、切通しを走っているような状態になる。山に挟まれたような**津田山**駅の東側に、その昔「七面山(しちめんやま)」があった。現在の東急田園都市線の前身である玉川電気鉄道の津田興二社長がこの山を削って宅地化し街作りに着手したことからこの山を「津田山」と呼ぶようになったというのが地名の由来。線路の南側の丘陵地帯は緑ヶ丘霊園・森林公園などがあり、市民の憩いの場になっている。

丘陵地帯を抜けると緑地の面積も激減して、背の高い建物が目立つようになり、**武蔵溝ノ口**駅。交差する東急田園都市線の駅名は「溝の口」、この微妙な違いが面白い。

「溝」の「口」という一見わかりやすそうな地名の由来が気になる。多摩丘陵から流れてくる溝ほどの細い流れの「口(始まり)」と言われているが、都市化が進みすぎて、二ヶ領用水の分水の流れも地形図や地図からは確認が難しくなり、地名の由来となった「溝」の「口」を確かめるのも難しい。

武蔵溝ノ口から南東に一直線に走り、第三京浜道路を潜り抜ければ**武蔵新城**駅。

秩父平氏の系統の小山田有重の三男重成が、この地に稲毛荘を興したのが「稲毛氏」の始まりで、北条家との姻戚関係となり鎌倉幕府成立にあたり活躍し、登戸の枳形城などの拠点を構えた。武蔵新城は稲毛荘の時代に新田開発された所で、「稲毛荘木月郷焼部(やけへ)」と言われていた。「木月」という地名は、東横線元住吉駅付近に残っている。

さらに南東へ走る南武線の左車窓に富士通川崎工場が見えると**武蔵中原**駅。徳川家康が鷹狩りに出向く平塚に中原御殿や陣屋を作ったことから、江戸から御殿へ行く道が整備されて中原街道と言われるようになった。武蔵中原という地名は、「中原街道がある所」として誕生したということらしい。平塚市にも中原町があり、御殿町もある。今や「中原」は、小さな町の名前どころではなく政令指定都市「川崎市」の区の名前にもなっている。

武蔵小杉駅が見え始めると、南武線にこんな風景があるのかと驚くような高層ビルの林。「小杉」は橘樹郡中原村の小字だった。江戸時代には中原街道に小杉宿が置かれたところで、二ヶ領用水によって潤った水田地帯が広がっていた。御殿町・陣屋町などの町名が歴史を物語って残っている。

南武線は東に向かい少しずつ多摩川に近づき、僅かな駅間距離で**向河原**(むかいがわら)駅に入る。昔は多摩

川の東岸にあり武蔵国荏原郡下沼部村(今の東京都大田区)だったが、多摩川の流路の変化に伴い切り離されて西岸になってしまった。「川の向こう側」になってしまったことから、この地名になった。

平間駅の周囲には海拔 4~6mの平地が広がる。多摩川下流の平坦地という文字とおりの地名で分りやすい。駅周辺の地名や建物の名前を覗いて見ると、「玉川」「丸子」など多摩川の対岸にある地名が存在する。この辺りも多摩川の流路の変化の影響を受けているのかもしれない。武蔵小杉から約300m西側を横須賀線が並走し、平間駅の前には新鶴見操車場がある。

鹿島田(かしまだ) 駅の前には横須賀線新川崎駅前の高層ビル群が迫り南武線を威圧しているように見える。二つの路線を結ぶ長い連絡通路(今はやりのペDESTリアン・デッキ)が設置されている。雨に濡れずに乗り換えられるのはありがたいが、少々距離があるような気がする。鹿島大神社に寄進する田圃が(神田)があったことに由来する地名で、1889年の町村合併で日吉村となり、その字地名になったが、それまでは鹿島田村と言った。神社は新川崎駅の北東10分ほどの所にあり、兼業の幼稚園の敷地の中に建っている。鎌倉時代にこの地に開墾に入った人が、鹿島神宮から勧請して創建したと言われている。新鶴見操車場建設に辺り、昭和2年に現在の場所に移転したとのこと。

鹿島大神社から鹿島田駅まで戻る途中に「鹿島田商店街」と看板が下がっている道があるが、少々淋しげな商店街になってしまっていた。商店街と横須賀線の間の住宅地の中に常教山浄蓮寺という日蓮宗の寺があった。「天文9年(1540年)の創立、木月の妙海寺の日徳上人の開山、浄土宗大蓮坊を改称して日蓮宗浄蓮寺とした」と示されていた。裏木戸を抜けるとカギ型に曲がった細い路地があり裏通りに抜けられようになっていた。ここまで川崎市の駅が続いたが、**矢向**(やこう) 駅は横浜市鶴見区にある。平安時代までは東京湾に浮かぶ洲だったという情報が見つかった。地元の良忠寺は仁治元年(1240年)創建なので、その歴史の古さがわかる。鹿島田と矢向の間で、多摩川の流れは東側(東京都方面)へ大きく彎曲して線路から遠ざかる。川の流路が変わった結果と想像できるような大きなうねりになっている。その膨らみの中央部に東芝小向工場がある。

「矢向」の地名の由来は多説ありどれが正しいかわからないが、「夜光→矢向」という説と「矢口→矢向」という説がやや有力なように感じる。「矢向」を「矢口」の変形とする見方から地図を眺めると、多摩川の西側に「矢向」があり対岸に「矢口」がある。大きくS字状に蛇行する川の流れを見ると何か潜んでいそうな気がする。

尻手(しって) 駅の駅舎・プラットホーム・線路の大半と駅の東側は川崎市幸区に属するが、西側は横浜市鶴見区に属する。この駅も東京周辺の難読駅名のひとつに数えられて幾久しい。

日本武尊が合戦の合図として多摩川東岸の「矢口」から飛ばした鎬矢が落ちた所で、矢先が向いた所が「矢向」で、矢尻側が「尻手」と言われたという説があるが、「矢向」については新田義貞伝説もあり、信憑性は不明。ここから海辺の工業地帯に向かって走る浜川崎線が出ていたが、今は南武線の一部に組み入れられている。尻手駅から川崎駅へ向かう本線は、尻手駅を出ると南南東に走り、東海道線が見える所まで来ると「し」の字型に大きくカーブして北東に向きを変えて終点の**川崎**駅に入る。巨大な高層ビルが林立して何やら他所の国へ来たような雰囲気川崎駅はいつも賑わっている。

「川崎」という地名は文字通り、川の崎(洲)つまり、多摩川河口の三角洲にできた町という意味になる。多摩川を渡る場所にある東海道の宿場町として栄えた。古代に遡れば、武蔵国国府(府中)からの街道が、都に向かう東海道につながる主要な拠点でもあった。明治以降になると京浜工業地帯ができて海辺も賑わい、急激な工業化の影響で公害問題でも名を馳せた。今では情報通信業界のトップ企業がひしめく町になった。

南武線は1927年に開業し、当初は多摩川の砂利運搬を目的として敷設された。奥多摩で採れた石灰もこの鉄道で運ばれ、住宅地開発や各種産業の発展に寄与してきた。

昭和40年代前半まで車窓から梨畑と長閑な田舎の風景が楽しめた。その後、多摩ニュータウンを始めとする多摩地区の大規模な宅地化が進み、風景は一変した。

立川駅から川に沿って川崎駅に向かうと、「川の流れに沿った時の流れ」と「流れを横切る様々な道や出来事」が交錯して、面白い旅になった。4年後には「南武線開通百周年」と称して騒ぐ人も出てくると思われるので、まだ静かに旅ができる内にとあって鉄道を辿ってみた。